

# ART ESSAY

アート★エッセイ

## 「暇の効用」

曾谷 朝絵  
(画家)



月～金は学校の後、塾。土曜は習字と水泳。日曜は絵画とピアノ教室。これは小学5年生の女の子、Aちゃんの一週間の予定。彼女は時々体調を崩しながらも、小学2年生からこの生活を続けている。

こんな生活をさせて、日程消化マシンと化した子どもに、十代後半になったら、いきなり生涯の進路を選ばせるのだろうか？ それはかなり難しいことだろう。やりたいことも、そしてそれを自分の切り口で広げるためのイメージの引き出しも、ある程度、自由な時間があって初めて見えてくるものであり、形成されるものだと思ふ。

子どもを自由にさせると、無心で「好きなもの」たちを選ぶ。それらは多くの場合、受験競争とは関係ないが、そこには自分の適性や後々の武器になるものが潜んでいるのである。

私の場合、それはファンタジーの世界であった。小学生から中学生にかけて知った幻想的な物語や絵画は、私の作品に今も影響を与えている。

宮沢賢治の数々の傑作や「不思議の国のアリス」、「ピーター・パン」等に代表されるイギリスのファンタジー。リチャード・ダットやルドンの幻想画等々に浸った時間はとても幸せであった。

ファンタジーの世界への傾倒は、現実の世界がお

もしろく感じられるにつれて徐々に形を変えていった。非日常の世界は、どこか遠くにあるのではなく、むしろ日常の中にあり、そこから抽出したものにこそ説得力があるのだというふうに。

しかし、ファンタジーは、後に作品をつくる際に、日常の中に非日常を探すための、貴重なイメージの引き出しをつくってくれた。

「…というわけで、暇は大切なのです。あの時間がなかったら、私が絵を描くことは今よりもっと大変になっていたし、好きなことを見失っていたかもしれませぬ」と、娘を創造的な仕事につけたいと望むAちゃんのお母さんに話したが、「でも、あの子はお勉強も習いごと全部好きなんです」と言われてしまった。「全部好きってことは、どれも特に好きではないってことです。というより、忙しすぎて、味わえていないのです。彼女の疲れた顔を見て下さい」…とは、さすがに言えなかったが、私はやっぱり、子どもには将来自分のほんとうにやりたいことを見つけ、発展させるための時間と余力を与えるべきだと思う。

やりたいことをやるために湧いてくる力は、与えられたことをこなす力の何倍も大きいから。

(そや あさえ)



Slider (油彩37×80cm) 2005年

特集

## 造形教育にしかできないこと

第4回

健康な精神を目指して

## 「造形教育」は、現代の子どもたちの救いとなるのか

学校教育の現場に心の相談やカウンセラーが配置されて久しい。学校教育の問題点を心の教育とする傾向が一段と高まりつつある。少年による事件や犯罪が頻繁に報道され、「普通の子どもがなぜあんなことを」、「まじめでよい子だったのに」、そのような言葉を聞くたびに心が痛む。

普通の子どもとは、いったいどんな子どもなのだろうか。大人や親の世界によって組み立てられた子どもの姿が基準になっているのならば、あまりにも悲しすぎるのではないだろうか。子どもの世界は常に明るく輝いているのでは決してないはずである。子どもの心に「舞台」があるとすれば、成長するごとに役者が増えることになるだろう。舞台上上がった他者との否定的な関係が問題となって、自ら舞台を降りることもあるし、大勢の中に自分の姿を見失ってしまうこともあるだろう。言葉では表現できない内発的な感情が、子どもたちの心の在り様を表出することもある。

造形教育とは、本来「造形的な活動を通して、心を開き、子どもたちに生きることの意味や価値を問いながら、自主的・主体的・創造的に表現する力や、造形的なものの方・考え方、造形感覚や感性を培い、自他との関係の中に『自分らしさ』を求め、人間的な自立を促す」ことを教科の目標としている。造形教育の在り様が問われている今こそ、子どもたちには、造形活動をする必要な時間や場所、材料との出会いが確保されなければならないだろう。

教育改革が叫ばれる中で、最も重要な視点は、人間として成長するために、精神的な側面をもった教科こそが尊重されるべきであり、造形教育が果たすべき課題がそこにあると考えている。

## 普通の子の「生きにくさ」

●インタビュー／  
精神科医・帝塚山学院大学教授 香山 リカ

### 「自己肯定感」の低い子どもたち

今の子どもたちは、小・中学生に限らず、幼児から高校生、20代も含めて、広く子どもや若者の特徴という共通点を一言でいうと、「自己肯定感」が非常に低いことです。私たち医者の方で、「自尊感情」とか「自己肯定感」という表現をしますが、自分が自分であることに対する基本的な自信が欠けている子ども、あるいは自分のかけがえのなさというものを実感できない子どもが非常に増えています。それは、世代や地域、男女に関係なく、広く見られる現象です。

私は、今は大学の教員をしていますが、それまでは病院で臨床医を長年していました。その臨床の場で、登校拒否や引きこもり、女子だとリストカットや摂食障害、拒食症、過食症などのいろいろな事例を診てきました。病院の場で会う子どもたちは、いろいろな問題を抱えているわけですから、押しなべて自信が持てない、自己評価が低い、自尊感情が欠けているというケースは多かったです。そのときは私も、これは病院に来るような事例化したというか、問題を既に発症させている子どもなので、当然自信がない、自分を大切にできないというのは、結果としてそうなんだろうと考えていました。

ところが、大学の教員になって、別に何か問題があるわけではない、いわゆる普通の学生と接するようになりました。彼らと仲良くなって話を聞いたり、あるいは私が精神科医ということを知りつけて、学生が相談に来る機会も増えていく中で、自分に対する自信のなさや、自分を大切にできない、あるいは自分自身がかけがえのない人間だということを自分で認識できない、居場所がない、自分は役に立たない人間なんじゃないか、というような言い方をする学生たちが少なからずいるということに気づきました。

### かやま リカ

1960年札幌市生まれ。東京医科大学卒。学生時代より、雑誌等に寄稿。その後も臨床経験を生かして、新聞、雑誌で社会批評、文化批評なども手がけ、現代人の心の病について洞察を続けている。『老後がこわい』『いい子』じゃなきゃいけない』『ぶちナショナリズム症候群』『若者の法則』など著書多数。



そのとき、私はとても反省しました。というのは、先ほど言いましたように、若い人たちの自尊感情の低下、もう少しわかりやすく言えば、彼ら特有の生きにくさという生きづらさ、居場所のなさというものが、何か症状や問題があることの結果として、病院に来るような子どもたちには起きているのだらうと思っていたところ、そうではありませんでした。極端な言い方をすれば、多くの若者がそういった感情を実は持っている。自分は非常につまらない人間なんじゃないか、役に立たない人間なんじゃないかというような感情を持っている。ある若者は、その感情が非常に強いために、逆に今度は具体的な症状、不登校や引きこもり、リストカットのようなことを引き起こしてしまっている。でも、ぎりぎりのところで、そこまでならないようなケースはかろうじて高校や大学に来ているということで、両者の間にあまり質的な差というのは、実はないのではないかとこのことを考えるようになってきました。

そういう問題意識から、自分が接している学校だけではなくて、ほかの中学・高校の現場で教育に携わっている先生や、いろいろな教育関係の学者の方にお話を聞くと、やはりどこの教育現場でも同じようなことが起きているらしい。いわゆる、これまでのように崩壊した家庭から来たとか、非行歴があるとか、そういった子ではない、いわゆる普通の子です。そういう子どもたちが、自分に自信が持てないとか、何かにつけて「結局、私は」

「どうせ僕なんて」という言い方をして、自分自身で自己肯定感を持つことができないという話を多くの方から聞きました。

しかし、そういう経験の中で、「そうか、今の若者、子どもちというのは、押しなべて自信がなくて、自分のことを大切にできないのかな」と思いきや、一方でそれとは違う現象もある。というのは、そういう自分のことを過小評価するような若者、子どもたちと話をしていると、ふと「自分も何かできるんじゃないか」、「自分らしいことがしたい」、そういった言葉が聞かれることもあります。あるいは、「自分なんて最低の人間だ」という言い方をする若者に対して、こちらが「そんなことないよ、普通だよ」と言うと、逆に彼らが不機嫌になったりします。彼らは、自分はだめな人間だとは言っているが、普通や平凡になりたいかというところではない。どこかで、「あなたは特別な人間だよ」と言ってほしいと思っている。自分は特別だとか、他人とは違うことができるんじゃないかという期待や願望を持っているという姿も見えてきました。

つまり、極端な二つの価値観、一方では自分はだめな人間だ、生きている価値もないと思っているのもウソではない。ところが、もう一方ではそれでも自分は、もしかしたら特別な人間なんじゃないか、人とは違う、何かすばらしいことができるんじゃないかという「万能感」もある。そういう極端に違う二つの意識の中で引き裂かれているという姿がだんだん見えてきました。それが全国の子どもに起きているというわけではないのですが、どうも多くの事例や調査を見ると、程度の差はあれ、今言ったような問題が子どもたちに起きているのではないかと思います。

ある調査で世界6カ国の小学生に「自分はどんな人ですか」という調査をし、何項目かにわたって、「あなたは親の手伝いをよくしますか」とか、「あなたは人気者ですか」といった質問をしていくと、日本の東京の小学校6年生は、自己評価について、世界6カ国の中で最低でした。自分は人気者でもないし、正直者でもない、勉強も得意じゃないと自分のことを思っている小学生が非常に多い。でも、客観的にはそうであるはずはなく、日本の子どもは世界の他の子どもたちと同じか、あるいはもっと優秀なところもあると思いますが、とにかく、自分のことを「私ってすごいでしょ！」

と、小学生くらいでも素直に自信満々に思えない。思っていたとしても、それを言えない。そういうことが浮かび上がってきました。

特に女子の児童・生徒で、摂食障害、拒食症、過食症などの問題は、私が精神科医になって、すぐに社会的な問題になったので、もう15年以上続いていると思いますが、いまだに大きな問題です。最近は摂食障害も低年齢化していて、逆に高年齢化もしています。非常に年代の幅が広がっています。かつては、ダイエットの行き過ぎからくる拒食症などは、10代の思春期特有の女子の病気と言われていました。その理由としては、女性的に体がふくよかになっていくことに対する嫌悪感です。女になりたくないとか、女は醜い、女は汚いという観念が自分の中にあり、あるいはそれは、母親のようになりたくないという気持ちなのですが、そこからスリムな体でいたいと、ダイエットをしてしまうという傾向がありました。

しかし、最近はどうもそういうケースだけではなく、とにかく自分に自信が持てない、今の自分が好きではない、だから何かを変えたい、あるいは消してしまいたい、そういう意識からダイエットをして、ほんとうに体重が減って骨と皮のような状態になっても、まだそれでも自分のことを受け入れられないというケースも非常に増えています。今の自分、ありのままの自分をそのまま受け入れられない、ある程度客観的に自分ってこんな人間だと思えない、という特徴は、病院に来るような、はっきりと病名がつくようなケースから、一見今は学校などに適応して、普通に暮らしているように見える子どもまで、非常に広くあるように思います。

### 「いい子」でいることの大変さ

従来は自己確立というものは、ある程度モデルとなるものがあつたと思います。自己確立という問題が出てくるときに使われるアイデンティティーという概念は、心理学でも青年期の発達課題と言われて、そのアイデンティティーを確立するためにいくつかの問題に答えを出さないといけない。例えば、自分の進路や仕事に対する答え、あるいは自分が男である女であるという性別に対する答え、いくつかテーマがあつて、それに対して自分で答えを見つけていけば、その結果として自分のアイデンティティーが形成されるという、ある

種のお手本やマニュアルがあったと思います。

しかし、今の子どもたちは、大人からも「自分らしく生きなさい」と言われる。自分らしさとは何かということについては、「自分で考えなさい」と言われる。男としてこうとか、女としてこうとか、あるいは仕事、進路を自分の適当な手持ちの中から選ぶということではなく、「一番好きなことをやりなさい」と、非常に自由度が高い。自由度が高いというのは、一方で、何から手をつけていいかわからない、どうなるのが答えなのかわからない。別に今の時代は、いい大学に入ることが正解とも限らないし、女だからといって女らしく生きることが正解とも限らない。でも一方で、女だからといって女らしさにこだわらずに勉強ばかりして、仕事を一生懸命やっても、今度は「結婚できない」と批判されたり、どう生きていいかわからない中に放り出されたりしているものもあると思います。ただ、単純に大人になりきれしていない、大人になるのが遅くなっているというだけではなく、自己確立の手段や方法が非常に見えにくくなっているというのも原因の一つとしてあると思います。

親に対しても、かつては自己確立をしようというときに、親というのは、最初は理想というモデルとしてあって、ところがだんだん自我が芽生えてくると、今度は親が自分にとって邪魔な存在、自分の行く手を阻む存在として立ちのびてきて、親に対して反発をしたり、ときには敵対視したりして、思春期特有の親との葛藤が生まれてくるわけです。

ところが、今の子どもたちを見てみると、親ともほとんどぶつかり合いもないまま、何となく仲良しのままで、幼いときから小・中学生まで過ごしているという子どもも少なくない。子どもも、親に対して反発を感じることもありますが、何か言ったら嫌われるのではないかと、見捨てられるのではないかと、すごく恐れていて、親や学校の先生、大人に対して、思ったことをなかなか言えない。同様に、子どもに嫌われたら困ると思っている親がいて、子どもに対しても「こうしなさい」、「これをやってはいけない」など、はっきり示すことができない、どちらも顔色をうかがい合っていて、あまり本音で話せない。お互い当たり障りのないことを言い合っている。でも、いつも嫌われるのではないかと不安が募っていくというケースも少な

くないですね。もちろん、子どもであれば、だれでも、親の期待にそえる人間になりたいという気持ちはあると思いますが、そこで、親の期待にそって親を喜ばせることが自分の喜びでもあると思えるなら、まだ前向きです。しかし、その背後に、もし、親の意にそぐわなかったら、親を失望させてしまってこの家にいられなくなるのではないかと、親から見放されてしまうのではないかと、いつもおびえた気持ちでいい子を演じているというような子どもも増えていると思います。

そのように、「いい子」をしている子どもたちの話を聞くと、非常にぎりぎりのところで、とにかく1回でも失敗して、少しでも親に失望されてしまったら、もう自分はおしまいだというくらいの気持ちで、にこにこしたい子の顔の陰に、非常に追いつめられた状況で、そうしているという子どもも少なくない。でも、自分はそれくらいぎりぎりなんだということをだれにも見せない。今の子どもたちは、その辺の演技力が非常に巧みなもので、親や先生も「そこまで大変だったとは知らなかった」とみんな言います。

最近、奈良県の中学生が起こした放火事件ほど大きな問題でなくても、家庭内の暴力やちょっとした犯罪、リストカットをしてしまった、私が関わったケースでも、学校の先生や親もその子がそんなにつらい、追いつめられた状況だということに全く気づかなかったと言います。新聞やテレビでは「なぜ、気づけなかった。気づかないほうが悪いのではないか」という報道もありますが、恐らく、ポロが出ないように、子どもたちは親や大人の前では一生懸命いい子でいるわけです。だから、親にしても先生にしても、「この子は、自分が好きで勉強をしているんだ」、「この子は心から優しい子だから、反発しないんだ」と思い込んでしまっている。親の期待もそうですが、いつも人から誉められるとか、みんなからいい子だね、よくやっているねと、他人から評価されると自分でいられないという気持ちがあると思います。ですから、「失敗したって私は私だ」とか、「1回くらい失敗したって、関係は変わらないだろう」と、自分を信頼し、周りとの関係を信頼していれば、そんなにぎりぎりに追いつめられなくてもすむと思いますが、自分はいつも周りから誉められたり評価されたりしていることで、何とか自分でいられないという気持ちの子どもは、そこで少しでも失

敗をしたり、自分の人生に汚点がついたりすることを非常に恐れていますね。

### 造形的な活動について

私は精神科の病院に勤務していたときに、患者さんに造形作品をつくってもらうことは、日常的にやっていました。レクレーションや気晴らしの一環としてやることもあれば、より治療的な意味でやることもありました。どうしても精神科の治療、カウンセリングは、言葉を介して人と関わることが多いのですが、言葉というのは、うまく表現できたときには非常にカタルシスもあり、そこで洞察も深まるということがあります。しかし、ときによっては、言葉を語る人にとっても聞く人にとっても負担が強いたり、あるいは言葉を発することで本人が傷ついたりすることもあるわけです。そういうときには、言葉ではなくて、手を動かしながら、ものをつくり上げるということが、心にたまったものを吐き出す手段にもなるし、それをシビアに言葉として吐き出すわけではなくて、ワンクッションあけるという意味では有効なことも多かった。

私自身は非常に不器用で、子どものころ、図画工作や美術は得意ではなかったのですが、患者さんの中でほとんど話をしない人に、「つくってみたら？」と勧めると、非常に独特な作品をつくれたり、絵を描いたりするケースはよくありました。アートセラピーというのは、ただつくらせるというよりは、それを介して何かコミュニケーションをするまで持っていけないといけなないので、本来の意味ではそれはアートセラピーとは言えないと思います。ただ、アートというものには非常に近いのかなと思います。目的のために絵を描くわけではなく、ただ描きたいから描いている姿を見ると、いろいろ考えさせられました。私たちが絵を描いてもらうときに注意するのは、言葉ではないので、逆に描きすぎてしまう、つくりすぎてしまう、あまりにも自分の思いを出しすぎてしまって、歯止めがきかなくなる人もいるので、その辺は注意をします。

よく最近、犯罪を起こした少年だと、その子が小学校のときに描いた絵が、こんな恐ろしい絵を描いていたとか、その当時から怖い絵を描いていたとありますが、こういうグロテスクな絵を描くから犯罪者の要素があるとは一概には言えないし、

むしろ自分の中にあるダークな面を表現してしまうことで、自分自身はそういう面が薄くなるという効果もあります。もちろん、作品と描く人格というのが一体化していないという人もたくさんいますから、問題を起こした子どもの作品を取り上げて、こういう要素が見て取れるという言い方をするのは、賛成できないですね。それが、子どもたちが自由に描くということの妨げになって、「今、怪獣の絵を描きたいけど、そんなの描いたらあんなふうに取り上げられるんだ」と思ったら、描きたいものも描けないのじゃないかと思えます。子どもって、攻撃的で残酷な部分はいくらかでもあるので、それが造形に表現されてしまうというのは、ごく自然なことだと思います。だから、そういう作品が出てきたからといって、すぐに警戒して、おかしいんじゃないかと考える必要はないと思います。(談)

## 造形プラザ

### ● 埼玉大学教育学部附属小学校 教育研究協議会

日時：2006年10月17日(火)・18日(水)13時～16時40分  
 図画工作の公開授業および研究協議会は18日(水)  
 会費：1,500円(要項代含む)  
 問い合わせ：330-0061 さいたま市浦和区常盤6-9-44  
 埼玉大学教育学部附属小学校  
 TEL048-833-6291

### ● 千葉大学教育学部附属小学校 公開研究会

日時：2006年10月26日(火)・27日(水)9時～16時  
 図画工作の公開授業および研究協議会は27日(水)  
 会費：3,000円(要項代含む)  
 問い合わせ：263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33  
 千葉大学教育学部附属小学校  
 TEL043-290-2462

### ● さがみ風っ子展(小・中の野外造形、室内造形作品)

会場・日時：神奈川県相模原市「淵野辺公園」  
 2006年10月27日(水)～29日(日)9時～16時  
 「女子美アートミュージアム」  
 2006年10月25日(水)～29日(日)10時～16時

### ● 東京都図画工作研究大会 北多摩大会

会場：府中市立若松小学校/府中市美術館  
 日時：2006年12月15日(金)  
 9時～17時/9時30分～13時45分  
 会費：3,000円(資料代含む)  
 問い合わせ：東村山市立南台小学校 菅沼晶子  
 TEL042-391-8117



# 子どもたちの心の回復を目指す

— 高尾山学園の図工・美術教育の実践を通して —

東京都八王子市立高尾山学園 野崎 龍雄

## 学び直しと居場所がある学校を目指して

本校は構造改革特区1号の認定を受けて、2年前の4月に開設した。日本の公立学校で初めての、不登校児のための公立の小中一貫校である。現在114名が在籍して学んでいる。

高尾山学園の子どもたちの目標は、まず、登校してくることである。登校意欲を促すための子どもたちへの配慮がなされている。

その特徴は、子どもたちに自分の居場所づくりができるようにと考えていることである。

授業に行き詰まったときに遊ぶことのできるプレイルームには、卓球台やビリヤード台、手づくりのゲームなどが揃っている。教室に入れるようになるまでの橋渡しとしての場所に、心ゆくまでいることによって、学校に馴染むのである。子どもは、遊びながら人と関わり、少しずつ元気になって登校意欲が芽生えてくる。その目的は、自分自身が楽しく遊ぶということである。子どもが学校を楽しみと思うのは、休み時間に遊べるからと言うと誰もが納得するであろう。

学校の授業や教室の雰囲気が苦手な子どもたちにとっては、一時避難場所的な保健室が和やかな語らいの場所となる。緊張感や不安感の強い子どもが多い高尾山学園にとっては、特に相談室の役割は大きい。心の安定を図るためのカウンセラーによる癒しの空間は、今のままの自分を丸ごと受け入れてくれる大切な場所となっている。

そして、教室である。高尾山学園は、紛れもなく公立の学校である。教室での授業学習が大事な柱の一つであることは、否定できない。何よりも登校することが目的なので、無理に授業に参加させることはしない。子どもの自主性に任せられているので、授業を受けない選択「パスあり」が許されている。私たち教員は、もともと「教室に子

どもがいる」または「教室に子どもが来る」ということを当然のように考えているので、現状に慣れるのに時間がかかった。100%不登校だった子どもたちは、小さなきっかけで再び不登校となる可能性がある。心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因や背景によって登校しない、登校したくてもできなかった子どもたちが、学び直しをしようと再登校を目指している。本校では、教室での授業が子どもたちにとって居心地のよい場所となるかが問われているのである。

## 図工・美術教育が心の回復に果たす役割

教室での一斉授業は、発達段階や学力に合わせた習熟度別の授業が成り立ちにくい。不登校期間がそれぞれに違い、その上に学習障害(LD)・注意欠陥多動性障害(ADHD)・高機能自閉症・アスペルガーなどの子どもも少なくない。私たちは、子どもたちの不安感や緊張感を少しずつ和らげながら、丁寧に人間関係を築き上げることに力を注いできた。

本校では、もう一人の美術教員と二人でチームを組み、授業を行っている。子どもたち一人一人が心身ともに回復し、健康になることを願い、試行錯誤しながら、毎日ほらほらどきどきして取り組んでいる。指導の考え方としては、さまざまな子どもたちに対応するために、学年を問わずに取り組める題材や内容を工夫したことである。その指導においては、自分の自由な思いや願いのもとに発想や構想で自分のやり方を見つけ、今できることを大切にしながら取り組めるようにしてきた。美術教員の「無理しなくてもいいよ」「今できることを大切に」「自分らしさ、君らしさがいいんだよ」の言葉かけが、子どもたちを安心させ穏やかにさせている。

不登校の子どもたちは、子どもや教師との人間

関係でつまづくことも多い。さまざまな学習活動などで、少しのトラブルであっても強い不安感や挫折感をもつことがある。不登校になったときと同じような状況に出会うと耐えられなくなる。心が傷ついた子どもは、人や学校を恐れるあまり攻撃的になったり、引きこもったりする。そのような意味において、アートセラピーに代表されるストレス対処方法や教育訓練で用いられている芸術療法には大切な理由がある。芸術療法には、副作用がほとんどない治療方法として認識されているからである。薬の場合には、いろいろと試す過程で副作用が出る可能性がある。また、カウンセリングにしてもやり方によっては、治療者と非治療者との関係の中で副作用が出ることもある。その点で芸術療法には無理がない。非指示的に接することで、子どもたちは好きなように自由に気の向くまま絵やものをつくっていくことができる。描きながらつくりながら、この世でたった一つしかない、かけがえのない自分を大切にしながら、少しずつ自分づくりをして心を回復していく。図工・美術教育の大切さは、活動や完成作品が、みんな違ってみんないいんだの中に、遊びの効用や癒しの要素がいっぱい入っている。図工・美術の学習を通して、心が回復していくからなのである。

## 確かに子どもたちの心は回復してきている

図工・美術教育は、子どもたちの心を回復させるための役割を多く担っている。子どもが自ら学んでいこうとする力を大切にする。私らしさ、君らしさを大切にしようとしていることが学習意欲を芽生えさせていく。子どもの自発的に学んでいこうとする意欲そのものを図工・美術教育の中心としている。このような子ども中心の取り組みが、子どもたちの心を元気に回復させてきた。

それは、当初描いていた登校率50%を超えればという思いに反し、昨年度は60%の登校率を超えた。図工・美術の授業への出席率が大きく上がったことも成果である。今年度の7月の全校の登校率は70%を超えた。そのうち図工・美術の授業への出席率は90%を超えた学年もある。

今年度からは、小学部から中学部まで基礎的技能に親しむということで、授業の始まりに行っている5分間課題を楽しみにしている子どもが多くなった。顔の表情、笑顔のグラデーションでは、



八王子市のTシャツデザインコンクールに応募して、見事、入賞を果たした作品。点描で「あんこう」を描いている。担任やカウンセラーがあまりにも夢中になって取り組んでいるので、疲れさせないために、何とか中止させてもらえないかと相談された次第である。本人はとても満足していた。

思わずこちらが感心して微笑んでしまう作品をさらさらと描いて楽しんでいる。初めは自分の描いたものを見られまいとして、両手で覆い隠してしまふ子どもたちが、今年は市のTシャツデザインコンクールに挑戦して入選するということがあった。また、放課後、残って絵を描くことも日常に見られるようになった。夏休みには、自主的に登校して部活動のポスターを描いて、廊下に掲示したり、写生や石膏デッサンをして自分の技術を向上させようとしていたりしている姿も見られるようになった。子どもたちに寄り添う図工・美術教育によって、子どもたちの心が回復している手応えがある。(のざき たつお)



楽しい活動を通して子どもの思いや願いのもとに自己実現を目指すこととしている。「気持ちを感じ合える」「自信をもてる」「自分を伸ばせる」は本校の教育目標である。

# ゆっくり、ゆっくり

～図工・美術教育で心と身体のバランスを取り戻す～

東京都豊島区立西巣鴨小学校 北角 きよ子

## はじめに

私の勤務する学校は、ごく普通の公立小学校である。そして、そこに通うごく普通の子どもたちも、現代のストレス社会の中で生きている。

子どもたちは地上に生を受けて以来ずっと、色と形、物質、さまざまなイメージの中をそれらと深く関わり、響き合い、影響を受けて「生きている」。そして、子ども自らも常に何らかの「表現」をし、価値を創造しながら生きていく。その普遍性ゆえに、公教育(初等義務教育)において、その生をより豊かに創造的に生きるために、すべての子どもたちに図工・美術教育が必要なのだと考えている。それは、図工の中にすべてが含まれ、全教科の中に図工が含まれるような有機的、総合的なものになるとよいと思う。

また、心と身体のバランスを崩したとき、図工・美術教育は、子どもたちの心を開放し、ある種の「癒し」となる。単なるストレス解消ではなく、自分自身の心の力によるバランス回復となるのである。

## シュタイナーの芸術(治療)教育から

シュタイナー教育\*を自分なりに図工の授業に取り入れてきた実践を紹介してみたいと思う。

〈水彩絵の具による「ぬらしの技法」を使って描く。色彩による実践〉

海綿やスポンジで画用紙の表裏を湿らせ、にじみの効果を使って描く。絵の具の色数は2～6色、教師が指定し、以下に示すテーマや季節によって色数を変えて描いていく。

キーワードは「ゆっくり、ゆっくり」。紙の準備、絵の具の用意、筆運びもゆっくり。ゆっくり動かすことで筆先に意識が集中し、思いと行為が一体化する。子どもたちにとっては、心が色と響

き合い、深く包み込まれるような色彩体験となる。

### ①「色の響き」(1～4年)

水彩絵の具2～3色を季節や子どもの様子によって変え、色と色の響き合いを感じながら、短いお話を聞いて描く。

### ②「色の流れ」(5年)

黄、オレンジ、朱、赤、青、プルシャンプルーの6色の絵の具の順番は変えずに時間的な流れのイメージを考えて描く。移りゆく季節、一日の経過、人の一生など、なかにはトマトの一生や炎の中心から周りの色の変化をイメージする子もいる。



色の流れ「季節」

### ③「植物のワーク～植物、光の中で」(5年)

子どもたちに葉っぱを何枚か持って来させ、濃い鉛筆か色鉛筆で、初めは好きな葉の輪郭線を作るべくよく見て正確に描く。次に、葉を並べるようにし、葉の周りから形を浮かび上がらせるようにして描いていく。

二枚の葉の絵を見比べて、子どもたちに感想を聞く。「あとから描いたほうが光って見える」「不思議な感じ」などの答えが返ってくる。さらに、「葉っぱから出ているエネルギーを感じて描き加えてみよう」と提案する。

次に、水彩絵の具で「植物、光の中で」という



テーマで描く。水、光、養分、種、やがて芽が出て、葉や茎が伸び、花が咲き、根が張っていく。植物の生長に従って描いていく。植物の種類はその時々によって変える。

### ④「光と闇」(6年)

ウルトラマリンブルーとプルシャンプルーの青色2色で、「光と闇」を自分の心象風景で描く。



光と闇

ここでは、「色彩」による実践例のみとし、「形や素材」に関わる実践については、また別の機会に譲りたい。

## 本物に触れる

ここで言う「本物」とは、人が本気で心を込めてつくったもののことである。思いを込めてつくられたものに、何気なく、ときにはしっかりと意識的に、触れさせたいものである。美術館収蔵の作品をはじめ、工芸品や身近な道具など生活用品全般と、真剣に生きている人も含めて考えてよい。誰が「本物」とするのか? 本物を選ぶのは教師であり、造形教育に関わる大人たちである。評価の高い美術作品でも、まだ十分に判断力が育っていない子どもたちには見せられないと思われる作品については、大人が責任を持った判断をしていけばよいと思う。また、印刷物やバーチャルな映像については、子どもたちがそこに「質」を感じ取れるかどうかを判断基準にしている。つまり「直接体験」と言えるかどうかである。

多くの美術館と連携した授業や、今まで実施してきたNPO団体から派遣していただいた芸術家や地域ボランティアの表現者の方たちとの授業の中から、最近の実践例を紹介したい。

まず、本校のちょっとのんびりした4年生の子どもたちを森美術館(東京都港区)の「アフリカ・リミックス展」に連れて行った。そこでNPO団

体『芸術家と子どもたち』から派遣していただいたパントマイムの方、パーカッションの方といっしょに、ギャラリートークを経験した。

美術館側へは、作品解説よりも、子どもたちが作品を「見ること」に意識がいき、全部の子どもたちが一言でも作品についての言葉(感想)を発することができるようにしてほしいとお願いした。美術館に子どもたちを連れて行く場合でも、芸術家や伝統工芸家などの地域ボランティアの方に来ていただく場合でも、先方との綿密な打ち合わせが欠かせない。ただ連れて行けばよい、ただ来てもらえばよいということではなく、子どもたちの実態や授業のねらいに応じて、いっしょにつくっていく必要がある。

美術館で子どもたちは、こちらの予想をはるかに超えて、さまざまな意見や感想を生き生きと語ってくれた。家に帰ってからも「楽しかったよ」「また行きたい」と家族に話してくれたと保護者たちから報告された。

翌日の図工の時間、「アフリカン気分」というテーマで、子どもたちは集中して平面作品を仕上げた。美術館での気持ちの動きを線で表し、自分の受け止めたアフリカのイメージを色や形で表現した。さらに、次の週には鑑賞をもとに、パントマイムの方とパーカッションの方に身体表現の授業をしていただいた。子どもたちは心を開放し、生き生きとして、単に鑑賞した作品をなぞるのではない、ダイナミックな身体表現活動となった。

現代は、子どもたちの繊細な内面世界を守り、静かに育てていくことがとても難しくなっていると感じている。しかし、子ども自身の心の奥深いところにある願いを感じる力、本物を見抜く力、よりよい価値を創造する力をつけてほしいと思う。(きたずみ きよこ)



\*ルドルフ・シュタイナー(1861～1925) オーストリアの人類学者。哲学、教育、医学、農学、社会学等で独自の業績を残した。現在ヨーロッパを中心に世界各国に600を超えるシュタイナー学校がある。

# 子どもの椅子

FROM

青森県弘前市立第二中学校  
新谷 幸子



「夏休みに海や山へ行ったら、材料を拾ってきましょう」

自然の材料を用いた作品づくりをさせたい。そう考え、夏休みの思い出集めと称して、材料集めを宿題にした。生徒が持って来たもののほかにも、海へ行って、流木、貝殻、きれいな石を拾い、学校付近の山へ生徒を連れて、松ぼっくり、どんぐり、

落ち葉、すすきの穂、小枝を拾い、材料を準備した。持ち帰った材料は、美術室に材料BOXを準備し、その中に入れた。生徒たちが自由に使える「自然の恵み、贈り物」である。

好きな材料を選んで、生徒たちは「生き物」、「使えるもの」、「飾れるもの」の中から一つ選択し、作品をつくる。石と貝殻

のかたつむり、かさこ地藏、松かさの一枚一枚をうろこにした不思議な生き物。誰もが夢中になって制作していた。

流木の中に、白くすべすべした何かの骨のようになった木があった。ぶつかり合うとカラカラと音を立てる。一人の女子生徒がその流木を集め、

「先生、私この音好き」「涼しげな音がするね」「これで風鈴できないかな?」「いいアイデアだね。やってみたら!」

一つの発見から、生徒の発想はどんどん広がる。

しかし、いざつくろうとすると、うまく流木をぶら下げることができない。針金や麻ひも、

いろいろなもので試していく。失敗しても、迷いなく次々と工夫している。作品づくりに集中しているのである。

一本の長い流木を男子生徒が電動のこぎりで輪切りにし始めた。中央にあいていた穴に針金を通して輪にし、満足げである。私には何をつくっているのかまったくわからない。

「これは何?」「うーんとね。これは昔の人が使っていたお金!」

なんと温かみのあるお金だろう。縄文時代の人が使っているところを想像すると、わくわくし楽しい気持ちになる。

素材に出会い、生徒たちは独自の観点で素材のおもしろさを

発見し、新たな造形が生み出される。教師の思いをはるかに超えたすばらしい発想だ。子どもたちのみずみずしい感性に驚かされる。

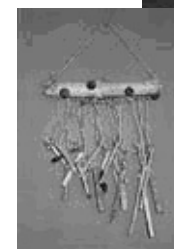
生活に潤いを与える作品づくり。ただの石ころから、流木から、子どもたちの世界が広がり、



「かさこ地藏」



「古代のお金 (山と海)」



「翼竜」



「海の贈り物 (風鈴)」

生活にユーモアや潤いを与えるアート体験ができ、楽しい作品がたくさんできた。

「美術が楽しい。早く続きがやりたい」そんな生徒の声が聞けるような授業づくりを目指したい。(あらや さちこ)

## 図工室

## 美術室

「ええっ! 図工室が、なくなっちゃうんですか!?!」

5年ぶりの異動が決まり、新任校への挨拶とガイダンスを兼ねて宮竹小学校を訪問した私は、この衝撃的な話を伺って、暫し唾然とした。本校の学区は、ここ数年でみるみる大きなマンションが建ち並ぶようになった新興住宅街だ。市内の多くの小・中学校が、年々児童数を減らし、空き教室の利用に四苦八苦している中であって、ここは、逆に年々児童数が増加し、既に空き教室が一つもない状態であった。そこに今年度から、特別支援教育の拠点校として、新たに特別支援学級を開設することが決定したのである。当然、今あるどれかの特別教室を潰さねば、特

### 図工室がなくなる…!?

熊谷 美香子(静岡県静岡市立宮竹小学校)

別支援教室をつくることはできない。先生方が、苦渋の選択の末、犠牲にすると決めたのが、図工室と図工準備室だったのだ。

学校改革における特別支援教育の大きな波には、逆らうどころか大賛成の私であったが、そのためになくなる一番手としてあがった教室が図工室であったことが、私には何ともやるせなかった。本校の先生方は、決して図工教育をないがしろにはしていない。子どもたちも図工が大好きで、放送委員のアンケートでも好きな教科の1位に、図工が選ばれている。それでも、

どの教科の教室を削るのかと問われたら、図工が一番に選ばれてしまうという、苦々しい現実を見せつけられた気分だった。まさに今の日本の教育の図工に対する現状を象徴するような出来事ではないだろうか。このまま学校改革が進めば、図工は隅に追いやられるどころか、存続自体が危うくなってしまおうという危惧さ感ぜずにはおれない。慌しく移動した図工の道具類は、倉庫の一室に押し込まれた。図工室がなくても、図工教育の灯は決して消さない…私は、改めて決心した。(くまがい みかこ)

### 日々の授業を問うことから

河内 直人(香川大学教育学部附属坂出中学校)

本来、美術科教育は一人一人に夢や活力を与え、自己実現を図る原動力となるものである。また、伝統文化や異文化を尊び、他者理解を助けるものでもある。白い画面に自分の想いを描く瞬間、どれほど勇気が必要なことか、どれほど想像力が必要なことか、どれほど生活経験や体験が重要であることか、どれほど課題解決のプロセスや思考力が求められることか、どれほど子どもたちをワクワクさせることができるかを我々美術教師は知っている。これほど教育的価値に溢れた教科が他にあるだろう

か。しかし、教育課程改訂のたび、美術の時間数削減、選択教科制などが危惧され、常に教科存亡の危機に立たされているのはなぜだろう。美術科の存在意義を理解しない者のせいにしたがり、世の中のせいにしたたりするのはたやすいが、今一度、現在の美術科教育のあり方を見直すことが重要であることは間違いない。まず、我々の授業改善が何より大切である。全国の美術教師の中で、毎日の授業に確かな手応えを感じている先生がどれだけおいでだろうか。他教科教師や保護者が「ぜひ、美術の

〇〇先生の授業を見て学びたい」と言い、何より多くの生徒が「美術は大切だ」と思ってくれるだけの美術の授業がどれだけあるのだろうか。むしろ、そこまで行かなくとも、そうありたいと願い、日々の授業研究に取り組む美術教師がどれだけいるのだろうか。生徒指導に追われることは理由にならない。なぜならば、同じ教育環境であっても他教科の教師は50分間の授業を発問と応答、板書で展開し、授業改善のためにかなり努力している。まずは、生徒が毎回楽しみにするような確かな授業づくりから問い直し、美術の有用性を訴えたい。これは自分自身へ向けたメッセージでもある。(かわうち まさひと)



# おはなし「ネット」ワーク ～広がれコミュニケーション～

千葉県市川市立中山小学校 北川 智久

## 1. はじめに

造形活動の楽しさはさまざまである。表現する楽しさや鑑賞する楽しさについては言うまでもない。

今回は、他者との関わりの中から生まれる楽しさや、作品を飾りつけする楽しさにも重点を置いて活動を構成してみた。

写真にある作品は、農業用などに使われる防風ネットに、簡易な方法で取りつけてある。壁に張ったネットの中で友達と「ネット」ワークを繰り広げようという意図だ。



「2 m幅のネットで海の世界をつくったよ」

## 2. さまざまな交流が生まれる

3年生の1学級と1年生の1学級の異学年交流で、作品をつくる段階からいっしょに取り組んでみた。学級だけでも十分楽しいし、各々の学級でつくって持ち寄ってもよいのだが、いっしょにつくるともっと楽しいと考えたからだ。

ネットの色が青いので、海や空の世界が表しやすいと考え、「海の中の世界」というテーマに設定した。

作品づくりについては、1年生はクレヨンやペンでかいた絵を切り抜く、3年生は描画材料を使

わずに色紙を切り抜いて組み合わせる、というように難易度を変えた。机を並べてともに作り、3年生がお兄さんお姉さんぶりを発揮しながら教えている姿がほほえましい。



「こうやるといいよ」

## 3. つけかえてお話が広がる

でき上がった作品を飾る。今回の掲示は、ほぼ全面的に子どもの手でゆだねた。展示しながら鑑賞し、鑑賞しながら展示する中で培われる力がある。効果的な飾り方はどうかと考えることは、プレゼンテーション能力の育成にも関わる。造形作品の展示を子どもの手で行わせることは、それ自身が学習になる上に、とても楽しい活動である。



「お話がつながってきた！」

「ここでいいかな」、「この組み合わせがおもしろいよ」、「みんなでお話しているみたいね」のようなコミュニケーションも生まれる。思いついたことを作文や鑑賞カードに書くのもよい。

ただし、「造形におけるコミュニケーション」というものを、文書のやり取りや会話によるコミュニケーションばかりに頼るのではもの足りない。より「造形らしく」、色・形・素材などの造形活動特有の視点を通して、つくりながら、飾りながら、飾り方を変化させながら、他と関わられるようなコミュニケーションを期待した。

子どもたちの考えたお話は、さまざまである。

- ・親子で散歩
- ・おいかけっこ
- ・お買い物
- ・水中サッカー

次の日にはまた違ったお話が生まれる。休み時間に作品をつくって追加したり、組み合わせを変えて楽しんだりすることがまた楽しい。廊下を通りかかった他のクラスや他学年の子どもたちが立ち止まり、声をかけてくる。これがまたうれしい。



「どんなお話つくってるの？」

## 4. 材料やつくり方

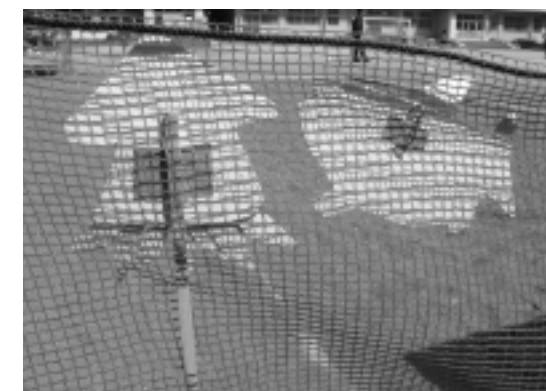
防風ネットは、農業資材を扱っているホームセンターなどで手に入る。網目は約5 mm間隔。1 m幅や2 m幅があり、1 mあたり100～200円程度で販売されている。

紙でつくった作品の裏側には、クリップをテープで留めてある。小さい作品には1個のクリップ、大きい作品には2個のクリップをつけておく。ペープサート※のように、わりばしなどの棒を貼り

つけておけば、網に刺して取りつけることもできる。ペープサートを手に持ち、お話づくりを楽しむ子どももいる。



裏にクリップを貼る



網の裏側(左：ペープサート型、右：クリップ型)

## 5. 終わりに

この方法は、学校行事の壁面装飾にも応用できる。ネットをはずせば移動・移設ができるし、網の表と裏の両側から鑑賞できるような場所に設置することもできる。校庭の遊具などに巻きつけて、迷路のような空間をつくり出すこともできる。ネットは再利用できるので、学校や学年で共用することもできる。

今回紹介したような活動を子どもたちと行うことで、造形的な視点で他者と関わるコミュニケーション能力や、場所や環境に働きかける力などが培われる。色、形、素材や作品に込められた思いなどを通じての関わり合いは、他の教科にはまねのできない視点で、一人一人のよさが生かされ、認め合える場となっている。

造形活動を通じて子どもの中に育つ力とは何なのか、今後も探っていきたい。

(きたがわ ともひさ)

※ペープサート paper puppet theater(紙人形劇)の略と言われている。日本では江戸時代の芸能が源流とされ、戦後、子ども向けの教材として広がった。絵を描いた紙をわりばし状の棒につけ、動かしながら話をする。

# イメージを形にする ～紙を使った立体表現(演習編)～

宮崎大学教育文化学部附属中学校 横瀬 勝彦

## 1. はじめに

生徒たちは、紙を折ったり、丸めたりすることで立体になることは知っているが、そのことについて深く思考するという経験はあまりしていない。

このような表現は、誰もが幼児期より遊びの中で何度も経験している行為である。紙を切ったり、折ったりする行為は、非常に単純な作業という印象をもつ、単純な行為だからこそ、これまで日常生活や造形活動の中で体験したことが作品に反映しやすいと考える。当たり前のことを「なぜ」という視点で考え直すことで、新たな表現が生まれてくると考えた。

中学校段階では、意図的に表現したいという欲求が出てきて、生徒たちはつくり上げる形に意味をもたせようとする傾向がある。これは、遊びが表現に変わることを意味する。生徒たちが遊びに夢中になればなるほど、多くの可能性を秘めた表現活動を行い、独創的な作品がつくり出されるのである。

このように、本題材は造形活動が本来もっている楽しさやおもしろさを存分に味わい、さらに現代美術、特に現代彫刻(立体造形、オブジェ)に通じる空間表現のおもしろさに気づいてくれることを願いながら実施した。

## 2. 学習の展開

本題材は1時間扱いの授業で、1枚の画用紙を加工して立体をつくるという授業である。はじめに、これまで経験した紙を使った造形活動を振り返り、紙が「立体」となるための加工法を確認するために、練習用に1枚の画用紙を渡した。

また、工夫することを意識させる目的で折ったり丸めたりしたパーツをどのように組み上げていくのかを試行錯誤させながら制作させていく。

ここでは、教師は技術的な教えはしない、生徒同士に教え合いが生まれるような助言をしていく。さらに「接着剤を使わない」ことを条件とした。生徒は作品に切り込みを入れ、穴を開けて組み上げていく。最初は、接着剤を使わないで組み上げることに手を焼いていたが、何度もやり直しや試行錯誤をする中で、生徒の取り組みは大変よくなってきた。制作終盤では、互いの作品を鑑賞し合い、よいところを褒め合い、アドバイスをする場面が見られるようになった。

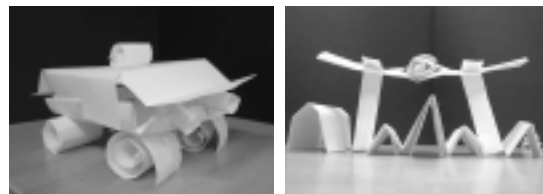


組み方を考える生徒

## 3. 作例

作例でわかるように、どの作品もバランスを取りながら絶妙な形をつくり出している。材料とコミュニケーションをとり、過去の経験や体験から直感的に、しかも20分という短時間でつくり出された造形作品であるが、生徒は形だけでなく、空間まで考えながら、立体造形を楽しんでいたことに驚いた。普段の授業では見ることのできない造形的なバランス感覚や空間表現感覚は、中学生の可能性を感じさせてくれた。

### (1) 具象的な表現の作品



「自動車」

「飛んだ!」

「ヒューマノイド」

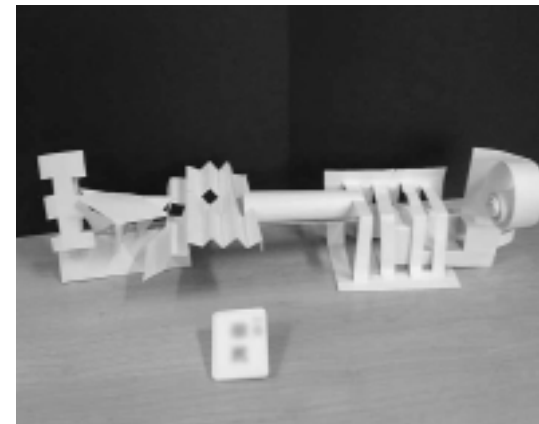


### (2) 抽象的な表現の作品

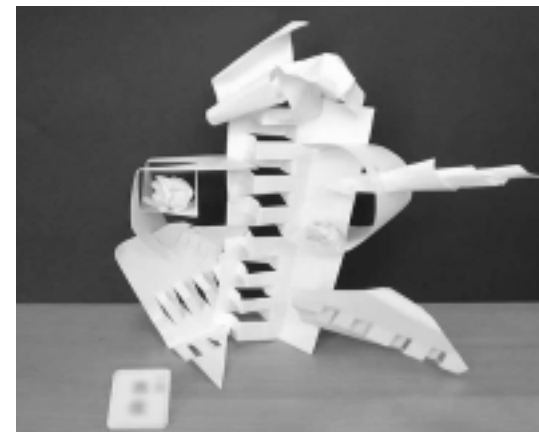


「わたしの気持ち」

「微妙なバランス」



「つないだ形」



「Fのオブジェ」

## 4. おわりに

生徒たちは画用紙を手にし、加工し始めたときに、幼児のように喜び、純粋な気持ちで造形行為をしていた。さらに、活動を進めていくうちに、遊びという行為の次に、見た目の美しさやバランスを考えながら、造形行為を行うようになり、作品に強い意味性を持たせようとした。生徒たちは知らないうちに現代美術と触れたことになる。また、かれらのつくった作品を見ながら「このような表現を抽象表現というのだ」ということを知らせることで、抽象表現への理解を深められたような気がする。

(生徒の感想)

- ・今日の授業は、紙を使っているいろいろなことをして、おもしろかった。もともと立つことのない紙を、折って重ねて立たせて、作品をつくるというのは意外とむずかしかった。紙をつなげる方法もたくさんあり、すごいなあと思いました。
- ・接着剤を使わなくても、紙を立体的に表せたり、つなげたりすることができるのだと、改めて感心しました。
- ・また、つなげる方法にもたくさんあって、友達とは違うつなぎ方ができ、とてもおもしろかった。特につなぎ方によって、長さが変わったり、大きさが変わったりすることに興味がわきました。
- ・立たせ方にもいろいろあり、折り曲げるだけではなく、友達作品には自分の思いつかないようなやり方のものがあって、少し驚きました。

この題材を通して「遊び」の中から生まれた「美術作品」は、立派な現代美術作品であり、造形表現を純粋に楽しんでいた証となった。他の題材でもこのような気持ちで造形活動に携われるようにしっかりと教材研究を行っていきたいと思っている。

(よこせ かつひこ)



## 「日曜はダメよ！」

カボチャドキヤ国立美術館館長 トーナス・カボチャラダムス

ふらふらと遊んでいるうちに、連載も最終回を迎えたのである。

はて、この連載の目的は何だったっけ？

賢明なる読者諸兄を「カボチャドキヤ国立美術館」にご招待することだったのである。

「カボチャドキヤ国立美術館」にご招待するには、「カボチャドキヤ民主主義人民共和国」にご招待する必要があったのである。

「カボチャドキヤ見聞録」の著者である、博覧強記において世に並ぶ者なき故・種村季弘先生を別府の温泉地獄からお呼びして、「門司港駅」「ハーレム・ホテル」「温泉連絡船」など、カボチャドキヤの名所巡りをしていただいたのである。

賢明なる読者諸兄の中には、すべて吾輩の作り話だと疑っておられるむきもあろう。

しかし、博覧強記において世に並ぶ者なき故・種村季弘先生は言い残されたのである。

「カボチャドキヤは心の眼の開いた人には実在する」

賢明なる読者諸兄は、吾輩を信じて国鉄門司港駅に到着されるであろう。門司港駅からは徒歩にても、人力車にても、円タクにてもよるしいが、西鉄の乗合自動車ならば、山手経由・田の浦行きに乗車され、谷町にて下車されたい。

読者諸兄の心の眼には、かぼちゃ色のかわいらしい洋館が見えるであろう。

「カボチャドキヤ国立美術館」は実在するのである。

解体の危機に瀕した大正7年の建築物が篤志の市民の手によって、世界に類のない美術館に生まれ変わったのである。

日本国の制度上は、北九州市門司区谷町2-6-32 (TEL093-331-7473) ということになる。実在するのは、土曜日と祝日の11時から16時までで、日曜日や他の曜日には消滅するので注意されたい。

幸い本日は開館日である。セルリアンブルーの

鮮やかな玄関をぎしぎし開けると、でっかい木製の蛙が迎えてくれる。

指示に従って振鈴を鳴らすと、鈴を振るようなかわいらしい返事とともに、ボランティアのお嬢様が現れるであろう。

入館料300円を支払ったら、遠慮なく上がられるがよい。

心の眼の十分に開いた読者諸兄は、天才トーナス・カボチャラダムスの名作を心ゆくまで楽しめるだろう。

吹き抜けの大展示室には「かぼちゃのブリュッセル」「にこにこ元気町」「子供たちのかぼちゃ浄土」「アントニオ・ガウディ風のかぼちゃ浄土」など油彩の名作がある。奥の版画室には、銅版画集「かぼちゃ浄土」「貧者のバベル」など銅版画の名作がある。2階には、名作「みんなちがってみんないい」や名作銅版画集「カボチャドキヤ」の部屋、図書室、資料室がある。

疲れたら、喫茶室で庭園を眺めるのもよし、運がよければ、館長トーナス・カボチャラダムスのブロックフレーテの名演が聴けるであろう。

めでたし、めでたし。

(終わり)



「かぼちゃの浄土」

## 子どもたちが花開く大会に!

—第56回全道造形教育研究大会・札幌大会を終えて—

北海道造形教育連盟事務局長 菅原 清貴

から高等学校まで、すべての校種ごとに開催し、「子ども主義」に徹した授業づくりの土台を築いた。

大会1日目は、札幌市立澄川西小学校を会場に幼稚園から高等学校の子どもたちが集まり、扉ごとに開始時間差を設けながら、授業を展開した。文部科学省教科調査官の奥村高明氏もご多用の中お出でいただき、授業のご講評をいただいた。会場校児童全員による「全校造形」はもちろんのこと、すべての教室から子どもたちの花開く、生き生きとした瞳が溢れた。

## ●PMFオーケストラとのコラボレーション

大会2日目は、札幌市が誇る芸術の殿堂「札幌芸術の森」に会場を移し、パシフィック・ミュージック・フェスティバル組織委員会の協力を得て、音楽と造形教育の共演を試みた。また、全国造形教育連盟の富安敬二委員長と映画「トントンゴゴ工の時間」の野中真理子監督とのトークセッションも行い、実り多いものとなった。



フルオーケストラとの共演

## ●「開かれた」大会に

今大会は、各校種の壁を取り払い異校種に開く、PMFとのコラボレーション等を通して市民や道民に開く、参観を呼びかけ保護者及び地域にも開くことを通して、造形教育への理解を図る大会を目指した。また、「造形・札幌21」と題した89頁の実践事例集も同時に刊行した。

(すがわら きよたか)

今年の札幌の夏は真夏日が続き、北海道の夏らしからぬ日々であった。札幌の造形教育の仲間が燃えた大会が、真夏日の要因かと思いたくなるほどの熱中した大会であった。

私たち北海道造形教育連盟は、全道に18の支部を有する幼稚園から高等学校までの約970名の教師が集う研究団体である。毎年各支部を巡りながら「全道造形教育研究大会」を開催し、今年も札幌大会で56年目を迎えた。研究大会だけでなく、全道の仲間とともに北海道教育美術展の主催をはじめ、各種事業にも積極的に取り組んでいる。とりわけ、広大な地域を抱えるだけに、18の支部をまとめる手段として、HPを中心としたネットワークづくりを10年以上前から進めている。

さて、今回開催した研究大会についてであるが、2001年に全国造形教育研究大会札幌大会を開催し、5年の月日を経過しての大会である。

## ●徹底的に子どもに寄り添う

全道の造形教育に取り組む子どもたちにアンケートをし、「思うようにできない子どもの存在」「図工が好き！の吟味」「造形能力の吟味」等を踏まえたうえで、「楽しさあふれ、確かな表現を実感する造形教育」の具現化を模索した。

## ●「3つの扉」から迫る

校種の壁を取り払い、題材の開発・授業の構築すべてをこの3つの扉(こころ・くらし・つながる)を入り口としました。昨年度プレ大会を幼稚園



大会での全校造形の様子